

「善人」か「悪人」か

野瀬 隆平

自分が善人なのか悪人なのか、よく解らない。

ある会で、「無人島に一冊の本を持って行くとしたら何か」という例の命題が話題となった。

これに対しては、何人かの著名な人が「歎異抄」と答えていることから、「歎異抄」の内容を改めて見直してみた。

「善人なほもつて往生をとぐ、いはんや悪人をや」という言葉がよく知られている。一見逆のように思えるが、その根本にある考えはこうだ。

本来、人間はお金持ちになりたい、旨いものを喰いたい、などなどいくつもの欲にまみれた悪いものなのだ。それを自分は色々と善行を積んできたので良い人間である、「善人」だと思い込んでいる人もいる。

そんな心得違いをしている「善人」でも仏様は救ってくれ浄土へと導いてくれる。ましてや自分が「悪人」であると正しく理解している人は、なおさら往生できるというのだ。それには難しい修行はいらない。ただ、そのように信じて、誠に有り難いことであると阿弥陀仏への感謝の気持ちを込めて、ひたすら念仏を唱えさええばよいと言っているのだ。

親鸞聖人が説いた浄土真宗の教えを、弟子の唯円が歎異抄に書きとめた事を解釈すると、この様に理解できる。

勿論、仏教の他の宗派や、キリスト教など異なる宗教を信じる人たちがこのように考えているとは限らないのは当然の事であるが。

ところで、先日知人の葬儀に参列したとき、帰り際に手渡された「会葬御礼」の封筒。通常は「清め塩」が同封されているが、その塩が無い。代わりに何故塩を使わないのか、次のような主旨の説明文が入っていた。

今、命のある私たちは、欲に溺れ清らかな心を持ち合わせていない。「死」を穢れと考えるのは間違いで、むしろ穢れているのは生き長らえている私たちなのだ。従って、清めの塩を使うことは、「いのち」の尊さを私たちに命を懸けて伝えて下さった方に対して失礼であり、「死」を冒瀆する行為である。

さて、あなたはどの様にお考えですか。